

「さえ・まで」の分布についての一考察

朱 武 平

0. はじめに

「さえ」について、菊地（2003）は、「極限性をあらわすのがまさにその最も基本的な機能だと考えられる」（p.85）と指摘している。例（1）「今朝のことも思い出せない」、例（2）「アインシュタイン博士（極端的な例）でも、答えられないような難しい問題を、一般の人には無理であろうと予想されるが、大川先生が解けた」という「思いがけない」極端な出来事が「さえ」によって示される⁽¹⁾。

「まで」は、例（3）の「待つ」という事態の継続の終わる時、例（4）の移動の範囲が「上野駅」という到着点を示す用法がある。また、例（5）の「売上金まで盗む」といった述語のあらわす事態との結びつきで、意外や、常識では考えられないことを強調する用法がある。例（5）のような場合は、「事象の極限を特出強調する意で「さえ」にあたる」（此島1966、p.262）と指摘したように、「さえ」との共通性が示唆される⁽²⁾。

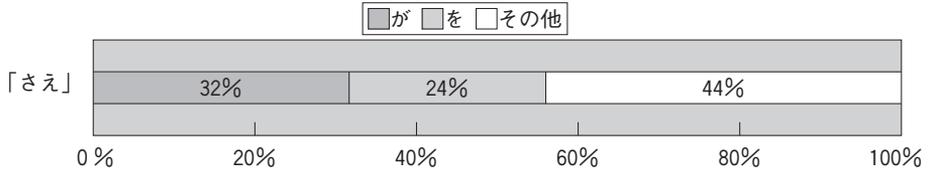
- （1）今朝のことさえ思い出せないようでは、もっと昔のことが思い出せる筈もない。
（死の島）
- （2）アインシュタイン博士でさえ答えられ無かった難問ば、大川先生はすっぱと解い
だんだから。知ってだか（下駄の上の卵）
- （3）とにかく明日まで待ってください（一瞬の夏）
- （4）上野駅まで歩き、電車で秋葉原というところへ出て、そこで乗り換えて水道橋駅
で降りる（下駄の上の卵）
- （5）都会なら、柿はもちろん、売上金までぬすんでいくでしょう（顔）

「さえ」と「まで」は「極限」を示すことで共通する意味を持っているが、個々にはまた異なる意味領域や構文的特徴における相違もある。本稿では、二つの助詞の文中での分布に重点を置き、「さえ・まで」が付加する要素、付加される要素の分析によって、両者の近似点と相違点を含め、二つの助詞の構文的特徴の考察を試みる。

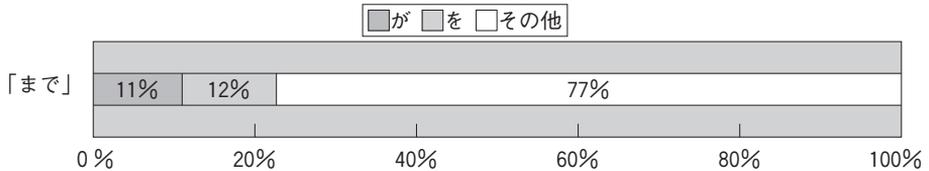
1. 「さえ・まで」の前に来る要素

名詞（名詞句）、名詞の格形式、副詞、連体形などが「さえ」「まで」の前接要素として現われる。

グラフ1 「さえ」：格の「代理」の出現比



グラフ2 「まで」：格の「代理」の出現比



1.1 名詞（名詞句）に後接

「さえ」「まで」は名詞のあとに直につき、いわゆる格の「代理」をすることができる（上掲グラフ参照）。例（6）（8）は主格、例（7）（9）は目的格が「さえ」「まで」によって「代理」され、「極限」の意味をあらわしている。

- (6) 彼女さえこなかったら、こんなことになりはしなかったのだ。(波) [彼女がこなかったら]
- (7) 風に顔をそむけるようにまげても、風は彼の吸うべき空気さえ奪い取った。(孤高の人) [空気を奪い取った]
- (8) しかしね、母親まで、寄ってたかって、息子のいびり役になることはないもの。(太郎物語) [母親が、寄ってたかって]
- (9) 私だけじゃなく、それを見て、泣いた子供までぶったんです。(化石の森) [子供をぶった]

「数量詞+まで」は、例（10）のように、量的限界を示す格助詞「まで」の用法が一般的であるが、例（11）は、「四人まで」と解することもでき、単に量的限定ではなく、話し手の驚きの気持ちを示すモーダルな態度をあらわしていると考えられる。

- (10) かの女の母もそうであった。そして六人の子を生んだ。五人まで女であったために、それがじぶんひとりの責任であるかのように夫のまえで気がねしていた。(二十四の瞳)
- (11) 清州の女性観を、康太はくわしく知りたと思っている。愛していた妻の死後は、おいそれとのち添いがもらえないはずだが、つぎつぎと四人まで妻を経験して、けろりとしている。(顔)

一方、「さえ」は例（12）のような不特定な数量詞のあとにつくことがなく、例（13）「その」など特定の指示詞が必要とされる。例（14）の例は、「十円」というお金の金額ではなく、「十円コイン」と理解したほうが妥当であろう⁽³⁾。

- (12) 会議室はせいぜい五十人ぐらいがせいっぱいのところだったが(孤高)
 *せいぜい五十人さえがせいっぱいのところだった
- (13) その二人さえこの頃は話すことがなくなっていた。(花埋み)
- (14) 姉の家を一銭も持たずにとび出し、東京のどまん中を二時間半も歩いた。お金がないということ、それは決定的だ。テレする十円さえもなく、落ちていないかと路面ばかり見て歩いた。(二十歳)

1.2 名詞の格形式に後接

「さえ」は「が・から・まで」、「まで」は「が・まで」を除き、格助詞に後接できる。

1.2.1 格助詞「を」に後接

格助詞「を」が「さえ」「まで」の前に来ることがある。

- (15) 治安を維持するとは、人のいのちをおしみまもることではなく、人間の精神の自由をさえ、しばるといのか……。 (二十四の瞳)

寺村(1991)は「ガ格、ヲ格の名詞を『マデ』で取り立てるときは、ガ、ヲは必須的に消去されるといってよいだろう」(p.110)と指摘したが、許容度とは別に、言語資料から「をまで」の出現が稀であるとはいえないようである。

また、例(17)(18)「をさえも」「をまでも」の形で現われることがある。「をも」の「も」は対格「を」の働きを強化し、「極限」の意が一層強められるのであろう。

- (16) 父親の再婚の話を持出したら、とたんに不機嫌になり、以後口をきいてくれなくなりそうである。だけでなしに、父親に、そんな相手があったのかと、父親をまで、冷たい目でながめるようにならんとも限らない。(停年退職)
- (17) 文部省の命令をさえも阻止し得るほどの日教組の実力は、これら五十数名の執行委員がにぎっているのだ。(人間の壁)
- (18) または命をまでもなげ出して、多くの人々をすくい上げた、いろいろの人々のとうといはたらきをも忘れてはなりません。(大震災災記)

1.2.2 格助詞「に」に後接

格助詞「に」が「さえ」「まで」の前にくることがある。「まで」の前接要素が時間名詞、場所名詞の場合、たとえば、例(21)(22)を「今までつづいている」「農村まで」に換えたら、格助詞の用法になるが、「に」の前接によって、「極限」の意味が強調される。

- (19) もし酒にさえ酔っていなかったら(——これは瓢吉の述懐ではなくて作者の付度であるが)もちろんあんなところへゆく筈はなかったのであろう。(人生劇場)
- (20) 息子や娘には勿論、妻にさえ語ったことはなかった。(食卓のない家)
- (21) しかし、日本でもこの二つの思想派は、絶えず捻じ合い殴り合いして来て今までつづいているのを思うにつけ、いつも久慈と二人で論争して来たそのテーブルで、今も二人の青年が泡を飛ばしている姿が、やはり何ものかに燃え上って行って果て知れぬそれぞれの苦悶と楽しみとの現れのように見えた。(旅愁)

- (22) 片田舎の農村にまでも政治的陰謀の手がまわり、それが紛糾の原因となり、教育の成果を破壊しつつある。(人間の壁)

1.2.3 格助詞「へ」に後接

格助詞「へ」に付加することがあるが、出現傾向から「まで」のほうが「へ」につきやすく、格助詞「まで」との連続性から来るものであると考えられる。一方、「さえ」は「へ」に付加しにくいようである。

- (23) おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。(銀河鉄道)
- (24) 花吹雪が僕の心の中へまで降り乱れて来るようだった。(第一の手帳)
- (25) ずうっと上流の波の荒い瀬のところから海岸のいちばん南のいかだのあるあたりへまでも行きました。(イギリス海岸)

1.2.4 格助詞「で」に後接

「で」格に「さえ」が付加しにくく、例(26)(27)の「でさえ」をさしあたってコンピュータ「だ(で)+さえ」としたが、このような「N(名詞)でさえ」は、すでに「だ(で)+「さえ」」を離脱し、「でも」と同様、一つの独立した助詞へと発展したと考えるべきであろう⁽⁴⁾。「まで」は「で」格に付加して、「極限」の意味を示すことになる。

- (26) この穴あけは、熟練工でさえできなかった仕事なんだ。(戦艦武蔵) [熟練工ができなかった]
- (27) 東京からでさえ二日の行程である。(花埋み) [東京から二日の行程である]
- (28) それでも、注射器を携帯して、勤務先でまでヒロポンを打つという段階には菊本は立ちいたっていない。(われらが風狂の師)
- (29) そう……もし、あの手紙のことさえなかったら……あの馬鹿気た手紙のことさえなかったら……しかし、あったものは、あったのだ……夢でさえ、ああして真実を告げているというのに、いまさら自分で自分を言いくるめるようなことをして、何になる？(砂の女)

1.2.5 格助詞「と」に後接

「さえ」「まで」の両方とも格助詞「と」に付加することができるが、「と」の前に来ることはない。

- (30) 雪夫人は、女同士とさえ、一緒にお風呂に入るのは、恥かしいといっている。(雪夫人)
- (31) 純子が、殺された三好晃子が、北岡とまで関係を持っていたことを説明する。(女社長)

1.2.6 格助詞「から」に後接

「から」格に付加することがあるが、「から」の前に来ることはない。

- (32) この世界的大数学者の一挙手一投足からさえ何かを学ぼうと、あらゆる注意を払っていたものだ。(若き数学者)
- (33) なかには、一度ぐらいより会ったことのないような人からまで記念品を贈られていた。(謎の街)

1.3 副助詞に後接

「だけ」や「ばかり」など「限定」を示す副助詞に付加することがないようであるが、「など」に付加することがある。ただし、「などまで」は格助詞的の用法であるとも考えられ、判断はむずかしい⁽⁶⁾。

- (34) ただ疎開だ、避難だという場合には骨壺などまで持ち歩く必要はありませんから、それこそ庭の隅にでも埋めて置いてくれて結構です。(遺書)
- (35) 無理もない。その家に病人が出れば、庭掃除などまで、心のとどくわけがない。(雪夫人)

1.4 後置詞に後接

「さえ」「まで」は、「に」格支配の「ついて」、「と」格の後置詞「として」などの後置詞に付加することができる。

- (36) 数年来、日本には、外国作品についてさえ、批評らしい批評は存在し得なかったのであった。(播州平野)
- (37) 彼等小人輩は、怨恨の対象としてさえ物足りない気がする。(李陵)
- (38) 追われた働き蜂コンミューンの面々のその後の先行についてまで報じた新聞はなかった。(ノンちゃんの冒険)
- (39) 節子は弱々しい人であった。しかし彼女が廃人としてまで周囲の人達から見られるほど不具なものに成り行こうとは、どうしても岸本には考えられなかった。(新生)

1.5 連体形

「さえ」「まで」は連体形のあとにつき準体的に働くことがある。例(40)(41)で見られるように、形式上では「連体形+まで」「連体形+まで+が」であるが、意味的に格助詞「まで」に近いといえよう。また、例(42)は形式上「まつる」についているが、内実は「まつること」につく用法であると考えるべきであろう。

- (40) つみもなくわかいのちをうばわれたかれらの墓前に、花をまつるさえわすれていることがわかった。(二十四の瞳)
- (41) 彼女はまずCクラスへ行って、沢田先生が来られるまでしばらく静かに自習するように命じ、服がぬれている者は給食室へ行って乾かして来ることの許可をあたえ、クラスの委員長を教壇の上へ呼んで、自習の監督をすることを言いつけた。(人間の壁)
- (42) 家族をはじめ病院の主だった医師職員、看護婦や看護人やさては患者に至るまで

が威儀を正して整列しているのだ。これから衆議院議員の院長先生が宮中に参内するのを見送るというわけなのだ。(楡家の人々)

2. 「さえ」「まで」のあとに来る要素

「さえ」のあとに格助詞「が・を・に」がつく用法が見られるが、格助詞の前接に比べ用例は少なく、許容度が低い⁽⁷⁾。

2.1 格助詞が後接

2.1.1 格助詞「が」が後接

「さえ」は「が」の位置に来る時、格の二重表示を避けるため格表示しないのが普通である。例(43)は、特に格を強調するため用いられていると考えられる。「さえ」に比べて、「が」格は「まで」のあとにつきやすい(「まで」の名詞性が強く残っているといえよう⁽⁸⁾)。

(43) それをしみじみ眺めていると、宗教的な感激さえが湧いて来るようになるのである。(痴人の愛)

(44) 部屋の中の空気までが、じりじりとつめたくなくなってゆくようである。(人生劇場)

2.1.2 格助詞「を」が後接

例(45)の例では、主格をあらわす「わが子が」あるいは対格をあらわす「わが子を」の両方がありうるので、格関係が間違って受け取られることを避けるため、格を明示したと考えられる。例(46)の「を」格が後接する用法は「極限」の「まで」ではなく、格助詞「まで」であると考えられる。

(45) わが子さえをも無視するこの崇高な魂にとっては、その夫がどのようにして敗戦後の混乱した国で慰みとはほど遠い生活を送ってきたかということなど、もとより眼中にないにちがいなかった。(楡家の人々)

(46) 銀行の暗証番号はもちろん、口座番号までを暗記している。(sophia)

2.1.3 格助詞「に」が後接

「さえ」は「さえにも」の形でしか現われず、それもわずか1例である。係助詞の後ろに格助詞がつく「もが」「こそが」に比べても許容度は低いであろう。

(47) 人間は自分という個体の死だけではなく、人間という種全体の死さえにも、直面しなければならなくなりそうなのだ。(ノンちゃん)

一方、「名詞+まで+に」は、例(48)(49)のように、「動作がそのときよりもまえに成立する／したこと」(高橋他2005、p.45)の意味をあらわすものがほとんどであり、「までに」はひとまとまりの格助詞の用法を獲得しているといえよう。例(50)(51)の「まで」は「極限」を示す「まで」の用法ではなく、「女医者」「体罰」の述語はいずれも「なる」「至る」といった動詞で、到着点をあらわす格助詞「まで」の拡げられた用法である

う⁽⁹⁾。

(48) 明日までに返事をしろって言うんです。(人間の壁)

(49) 「彼」のことを考えまいと努力する一方で、「彼」の顔がよく思い出せないことに苛立ち、次の休日までに「彼」から写真を一枚貰っておかなくては、などと考えているような状態は、今までの自分からは想像もできない錯乱ぶりである。(エディプスの恋人)

(50) でも折角苦労して女医者までになったあなたが行く必要はないでしょう (花埋み)

(51) なぐった事の程度はともかくとして、体罰を加えた事実は本人が認めていることであった。それを体罰と認定するか、体罰までには至っていないと認定するか。(人間の壁)

2.1.4 格助詞「へ」が後接⁽¹⁰⁾

「までへ」の用法について、例 (52) は「まで」を取り去って「隅々へ行き渡り」になっても文意は変わらない、「へ」を取って「隅々まで行き渡り」になっても文が通じる。寺村 (1991) では、「Nまで」について「強調的な表現効果を発揮するのは (中略)、Nが、時間・空間上の一点を示すという意味特徴を元来もたないものである場合である」(p.116) と指摘する。筆者も妥当であると考ええる。「体の隅々」を空間と考えれば、格助詞の用法になる。ただし、文脈は比喩的、誇張的に描写されているので、「一切れの肉、一滴の油」が「それほどまで」「行き渡り染み渡る」と考えると、「極限」の意味と解することができなくもないであろう。「へ」が後接するということは、「まで」の副助詞性との関連があると考えられるが、「極限」を示す「まで」と格助詞「まで」とのあいだに連続性を持っていると考えたほうが自然であろう。

(52) 二人は、ノンちゃんの希望で、中華料理を食べた。赤いじゅうたんと暗い照明、中国風の透し彫の衝立で囲まれた落ち着いたテーブルに運ばれる料理は、どれもノンちゃんの舌にじわっと拡がり、きゅうっと吸い取られ、一切れの肉、一滴の油に至るまで、身体の隅々までへ行き渡り沁み渡って、ノンちゃんの干乾びていた腕も脚も、また内側からすべすべしてきて光り輝き始めたようだった。(ノンちゃんの冒険)

2.2 連体格への接続

「さえの」を用いた形が見られるが、例 (53) の場合、「内部からの」のあいだに「さえ」が割り込んだ用法で、「さえ」自体が「の」を介して体言を形成するのではない。ただ、「さえ+の」の用法が見られることは、「は」や「も」より係助詞性が弱いといえるかもしれない。「までの」は、例 (54) の用法が普通で、例 (55) 「戸村の人達は勿論親類までの」の用法はむしろ稀である。やはり格助詞「まで」の用法と見るべきであろう。例 (56) の「までの」は、「これほどまでの」などといった慣用的表現に限られる。

(53) この“質より量”の問題を含んで、研究業績の公正な評価方法の欠如というもの
は、しばしばBグループからの、時にはAグループ内部からさえの批判対象となっ

ている。(若き)

- (54) 皇帝の自然死までの期間、この川はぜったい地表に出現しない。(流亡記)
- (55) 民子のいやだという精神はよく判っているけれど、政夫さんの方は年も違い先の永いことだから、どうでも某の家へやりたいとは、戸村の人達は勿論親類までの希望であった。(野菊の墓)
- (56) 事実、彼は師のこれほどまでの称賛激励を得て、天にも昇る気持を味わった。(われらが風狂の師)

2.3 他の副助詞・係助詞が後接

「さえ」「まで」は「も」以外の係助詞と共に起しない(「までは」の形であらわれるものが、格助詞「まで」の用法である⁽¹¹⁾)。

- (57) 恋のために身をほろぼす事さえも美しい。(青春の蹉跎)
- (58) 教育内容までも支配しようとすると、現場は文句を言いたくなるんだよ(人間の壁)

3. おわりに

以上、「さえ」「まで」の構文的特徴を言語資料から調査し考察を試みた。その結果、「さえ」は他の助詞との前後接や、用言形成などの働きから係助詞の特徴をもっているが、「まで」は外形上副助詞の構文的特徴をもっていることがわかった。

しかし、「まで」は他の副助詞と異なり、対応する(形式)名詞がない(ただし、連体形を受けているように見える例は副助詞のもつ体言性に連続すること、他の助詞との付加の特徴から、内実は「さえ」に近い振る舞いをしているといえよう。

また、「まで」は、格との前後接において、「格助詞+まで」と「まで+格助詞」では、前者は「極限」の「まで」であり、後者は格助詞「まで」であることがわかった。格との前後接は意味的な対応ではなく、同音異形であると考えべきであろう⁽¹²⁾(格との前後接を以下の表にまとめた。表1、2の「NK__」は、<名詞(句)+格+「さえ・まで」>を、「N__K」は、<名詞(句)+「さえ・まで」+格>を略したものである。使う頻度が低く、用例が少ない場合は△で表示した)。

表1	さえ	が	を	に	へ	で	と	から	まで
NK__	×	○	○	○	○	○	○	×	×
N__K	○	○	△	×	×	×	×	×	×

表2	まで	が	を	に	へ	で	と	から	まで
NK__	×	○	○	○	○	○	○	○	×
N__K	○	○	×	△	×	×	×	×	×

【注】

- (1) 「さえ～すれば」という用法があるが、事態を成立させるために必要最低限の条件を出し、それだけで十分だ、他はいらない、あるいは問題にならないという条件文が使われる。条件文について、赤塚（1998）は『Pでなかったら』がほとんど感嘆文に近いことにも注目したい。日英語をはじめ、世界の多くの言語では、if not P! が感嘆文として文法化されて、話し手の願い、憧れ、嘆き、後悔など、さまざまな深い人間感情と不可分の存在になっている」（p.64）と述べている。このような用法も広く「極限」と見なしてよいであろう。
- (2) 高山（2003）は、「もともと「さへ」が表わしていた「添加」の意味は、「まで」が担うことになる。この中世期の変動の結果が現代語の「さえ」「まで」に繋がってきているのである」（p.107）と指摘したことも、「さえ」「まで」の関連性が示唆される。
- (3) 疑問詞のあとに「さえ」がつく用法は見られなかった。「まで」は「何から何まで」や「いつまで」「いつまでも」など慣用的な表現があるが、いずれも格助詞「まで」の用法である。
- (4) 「でさえ」は「でも」とよく似ている。その1、「でさえ」を取り去っても文は成立し、文意も変わらない。その2、「が」の位置に立って主格を代理することがある。
- (5) 言語資料から「とまで」は、引用の「と」が多く見られるが、引用の「と」に付加する用法は今後の課題として検討していきたい。
- (6) 「などさえ」を用いた用法では、条件句のなかでの使用という制約が見られるが、言語資料から「などさえ」の用例は少ないものの、下の例のような使い方も考えられる。
- ・ パンク修理キットなどさえあれば、誰でも走ることができます。
<http://www.cyclingtime.com/modules/myalbum/photo.php?lid=76856>
- (7) 「で・と」に付加できるのは格助詞「まで」のみである。
- (8) 「までが」は816例、「さえが（でさえが）」を含むは17例である。
- (9) 「極限」の意味合いを持つと思われる実例に関して、むしろ「にまで」と言い換えたほうが自然であろう。
- ・ いたいけな孫たちは時々若い叔母を無視して、用事を女中のように言いつけたり、嫁もまた雑巾のあて方までに口を出す様子であった。（草薙）
- 「までに」の形で現れるもの全2141例のうち、「その時よりも前に」といった時間、期限をあらわす「までに」が1472例を占めている。それに対し、「極限」の意味を示す「まで」は6例しかなく、全体の0.28%で、述語の動詞は「なる」「至る」など、格助詞の広げられた用法であるとみるべきであろう。
- (10) 「までへ」の用法について、下記の例は「まで」を取り去ると文が成り立たなくなり、格助詞の用法であると考えるが、むしろ「へ」ではなく、「に掛けて」が普通であろう。
- ・ 銀之助の送別会は翌日の午前から午後の二時頃までへ掛けて開られた。（破戒）
- (11) 長谷川（1969）は同じく「極限」をあらわす「さえ」と「も」の親和性について言及

したが、同じく「極限」をあらわす「まで」と「も」との共起について説明され得るであろうか。今後検討する必要がある。

- (12) 「まで」について言語資料から29487例の実例を収集し、他の助詞との相互相接について、実例を基に出現可能な組み合わせをすべて割り出し、それを実例から確認できたすべてのパターンとつきあわせて調査した。「まで」を一つの「とりたて詞」とした研究(沼田善子1986)でいう「格との前後接は不明確」という見解を認めるのは困難である。

【主要参考文献】

- 奥津敬一郎・沼田善子・杉本武(1986)『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 菊地康人(2003)「現代語の極限のとりたて」『日本語のとりたて——現代語と歴史的变化・地理的変異』沼田善子・野田尚史編 くろしお出版
- 工藤 浩(1997)「評価成分をめぐる」川端善明・仁田義雄編『日本語文法一体系と方法』ひつじ書房
- 此島正年(1966)『国語助詞の研究』桜楓社
- 近藤泰弘(2003 a)「名詞句の格と副一格助詞と副助詞の性質」北原保雄(編)『朝倉日本語講座第5巻文法I』朝倉書店
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 朱 武平(2005)「日本語におけるとりたて助辞の意味と用法—「さえ」について」『語彙と文法の相関—比較・対照研究の視点から—』松本泰文編 社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 第123集 千葉大学大学院社会文化科学研究科
- 高橋太郎(1978)『研究報告書I』国立国語研究所
- 高橋太郎ほか編(2005)『日本語の文法』ひつじ書房
- 高山善行(2003)「極限のとりたての歴史的变化」『日本語のとりたて——現代語と歴史的变化・地理的変異』沼田善子・野田尚史編 くろしお出版
- 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 仁田義雄(1981)「数量に関する取りたて表現をめぐる—一列と統合からの文法記述の試み—」『島田勇雄先生古稀記念ことばの論文集』明治書院
- 長谷川清喜(1969)「さへ(さえ)——副助詞〈古典語・現代語〉」『^{古典語}現代語助詞助動詞詳説』(松村明編 学燈社)
- 林 巨樹(1969)「まで—副助詞〈古典語・現代語〉」『^{古典語}現代語助詞助動詞詳説』(松村明編 学燈社)
- 松村明編(1969)『^{古典語}現代語助詞助動詞詳説』松村明編 学燈社
- 山田孝雄(1922)『日本口語法講義』宝文館
- 山田孝雄(1936)『日本文法学概論』宝文館

【用例引用資料】

CD-ROM 「新潮文庫100冊」

CD-ROM 「新潮文庫の絶版100冊」

青空文庫

(しゅ・ぶへい 千葉大学大学院人文社会科学研究科特別研究員)